

シャーマニズム の起源をさぐる

第19回 縄文道塾

令和7年12月1日

縄文アイヌ研究会
主宰 澤田健一

紀元前1000世紀前後

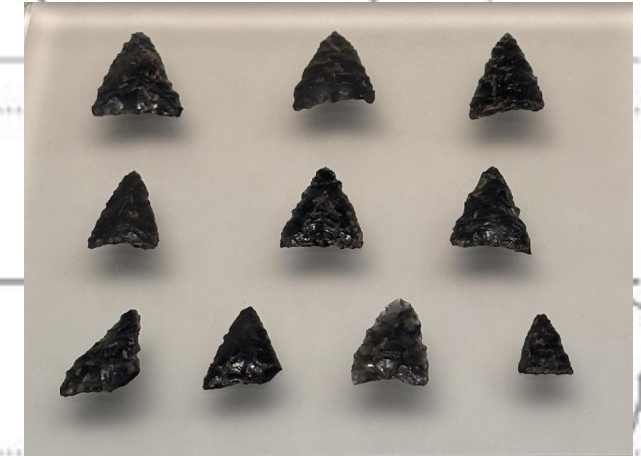
※ イスラエルや中東で9～8万年前以降になると
新人は消えネアンデルタール人だけになる

12～8万年前 スフル洞窟 カフゼー洞窟
10個体以上のホモ・サピエンの人骨
屈葬・ムシロガイ科の 貝製ビーズの副葬
イノシシの下顎骨を両腕で抱いて埋葬

9万年前 カタンダ遺跡
大量のナマズ類の骨と骨製銛
銛には返しがあり完成度が高い

6万4千年前
シブドゥ洞窟 矢尻
10万年前からと想定

10～7万年前 ブロンボス洞窟
10種類に及ぶ海産魚・約 30種の海産貝類
イルカ・アシカ・アフリカペンギン、銚漁
押圧剝離技法による最古の石器 → ナイフ形石器
10万年前 アワビ殻に保存した赤色顔料
ムシロガイ科の巻貝を素材としたビーズ



・ゴルディ人は火葬のあとで死者に別れを告げるとき、妻や子供は連れて行かぬようにと頼む。黄ウイグル人は死者に向って「お前の子供や家族を連れて行くな。お前の身の回りの物も持って行くな」と言う。もし死者の未亡人や子供、あるいは友人が後を追うように死ぬと、テレウト人は死者がその人たちの魂を持って行ってしまったのだと信ずる。死者に対する感情は相反性を持つものだ。すなわち、一方で死者は崇敬され、宴会に招かれる。そこでは死者はその家族の守護霊なのである。だが他方、死者は非常に畏れられ、生きている人間の間に再び現れることのないように、あらゆる種類の予防措置がとられる。死んで間もない死者は畏れられ、死んでかなり時間の経っている死者は崇敬され、守護者としての機能を果たすことが要求される

『シャーマニズム上』P346

・死者が村に舞い戻って来ぬようにするためにあらゆる予防手段がとられる。例えば、葬儀を行なった人々は墓地から帰るのに来たときとは違う道を通り、死者に道を判らせないようにする。彼らは帰路を急ぎ、家に着くと祓えをする。また交通の手段(ソリ、荷車など、死者の世界で役に立ちそうなものの全部)は墓地で壊される。さらに墓地から村への道は何日か夜も見張りが立てられ、火がたかれる。だがこれらすべての方法も、死者の魂が三日とか一週間はその家のまわりをうろうろするのを防げることはできない。もっともこれについては違う解釈も成り立つ。すなわち、死者は己のために死後三日、七日、あるいは四〇日目に行なわれる葬送儀礼がすむまでは、あの世へ向かって道を歩むことができないのだという考えである。

『シャーマニズム上』P347

・そして、死霊が埋葬者の後を追ってくるという迷信はアイヌにも伝わっており、死者の霊が追ってこないように草を結んで罫わなを仕掛けるのだという。あるいはエンジュの木を横に置き、死者が通れないようにする。死者を出した家の臨時の出口をすぐに塞ふさいたり、家そのものを燃やしたりもする。墓地では、死霊が後を追うことを恐れて声も出さず慟どうこく哭もあげずに帰る。その場で死霊に絶縁を言い渡す場合もある。墓地から戻る途中、参列者たちは清め草の束で自分たちの身体から悪霊を払い落として浄める。埋葬から帰ると祓はらえを行なう。集落によってさまざまな作法があるようだが、これらは「アイヌの死霊に対する恐怖感の著しい現れである」と指摘されている。昭和期のアイヌ文化およびアイヌ語の研究者である久保寺逸彦先生も、「アイヌの人たちが、如何に死を忌いみ、死霊を怖れ、葬制などに就ついて触れることは、出来るだけ避けたい気持ちをもっている」(『アイヌ民族の宗教と儀礼』草風館)と書き記している。

紀元前500世紀頃

現在東ユーラシアに住んでいる全ての人々は
南ルートでやって来た<ヒマラヤ山脈南側>
令和2年 東京大学・東大大学院・金沢大学

5万1200年前
インドネシア スラウェシ島
世界最古の動物の洞窟壁画
そのほとんどが **イノシシ**
ネガティブハンド指の切断

7万4千年前より以前
ジュワラプラム遺跡
ドバ火山灰層下 石器

インド南部:タミル語、トンド焼き、注連縄
門松、若水<ヒンドゥー教以前の古い祭り>

こうした儀礼の最大公約数的なものを列挙してみよう。

- (a) 叢林(超越のシンボル)への隔離期間と、死者のそれのような幼虫的存在。シャーマン候補者は死者と同化せしめられるという事実からも候補者に課せられる禁令(死者はある種の料理を食べられないとか、指を使えないなど)。
- (b) 亡霊の青ざめた顔色を身につけるため、顔や身体に灰や、ある種の石灰性物質をぬりつけること。葬儀用仮面。
- (c) 寺院もしくは霊のやどる家屋内での象徴的埋葬。
- (d) 冥界への象徴的下降。
- (e) 催眠術による睡眠。候補者を無意識にする飲料。
- (f) 苦しい試練。打撃、足を火のすぐそばにおいておくこと。空中につるされること。**指の切断**、および種々の他の残酷な行為。



紀元前400世紀頃

黒瀬海岸
(神渡海岸)
ニニギノミコト上陸地の碑
750m

黒瀬海岸(神渡り海岸)
ニニギノミコト日本初上陸
＜日本神話＞

4万年前 日本渡来

王塚古墳



百歩蛇信仰

4万2千年前 ジェリマライ遺跡
マグロ・カツオ(サバ科が半分)

天の羽々矢
蛇の呪力を負った矢

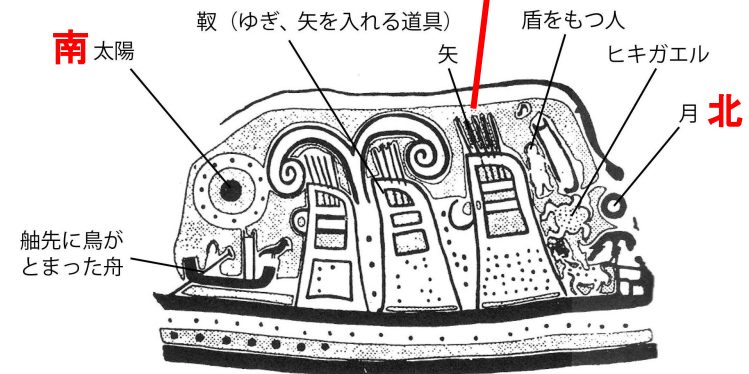


図1 珍敷塚古墳壁画

紀元前100世紀頃

縄文人は東ユーラシア人の根に位置している
令和2年 東京大学・東大大学院・金沢大学

縄文時代 石鏃
日本全国でイノシシ祀り
(伊豆諸島や礼文島)
縄文土器の動物文様に
ヘビとイノシシ

紀元前10世紀以降

極北地方 クマ祀り

続縄文時代

北海道でクマ祀り

北海道多副葬墓 クマの彫刻

東北と北海道の縄文土器 クマの文様

弥生時代

イノシシ信仰が途絶える

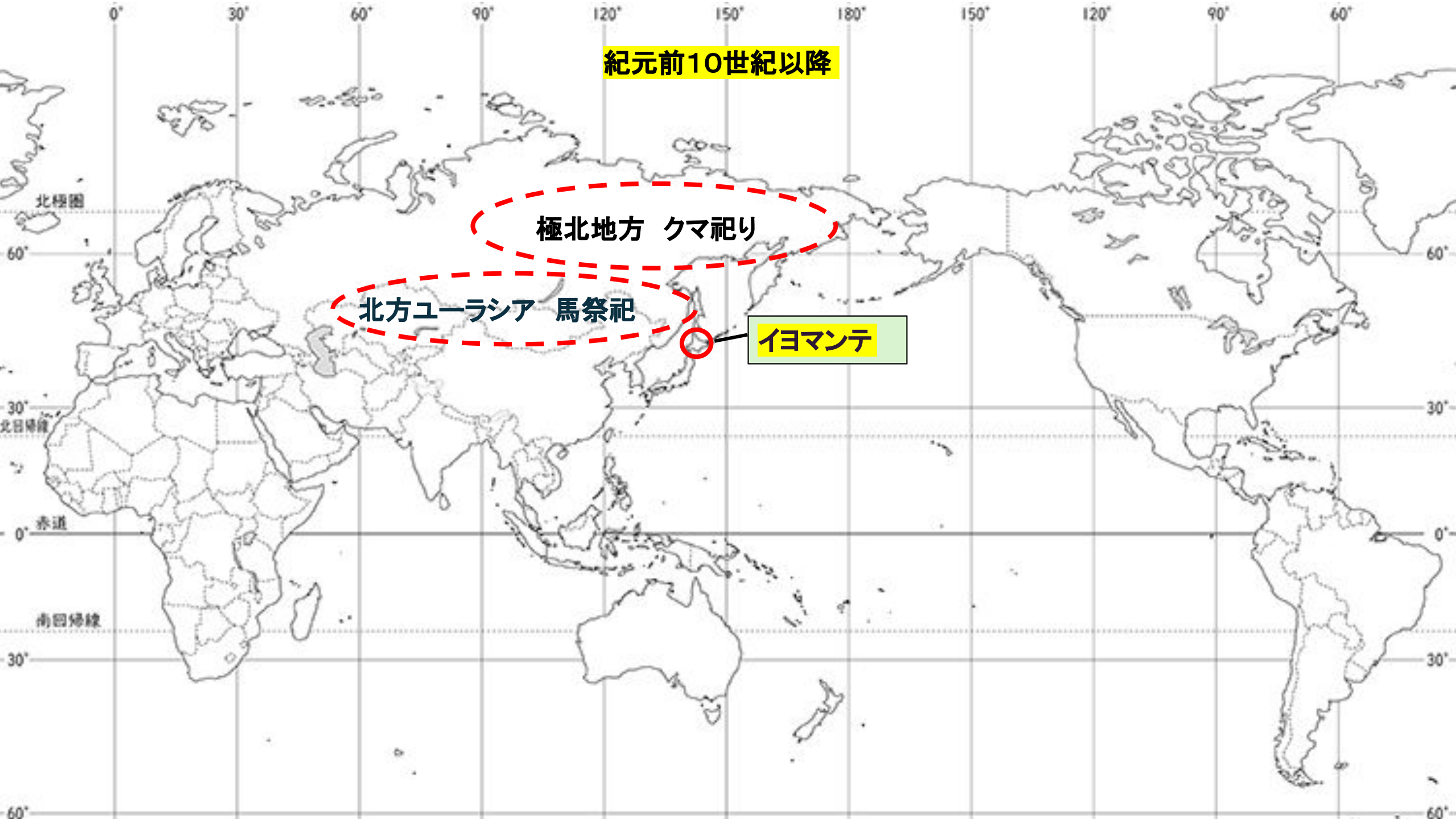
農耕祭祀 銅鐸

紀元前10世紀以降

極北地方 クマ祀り

北方ユーラシア 馬祭祀

イヨマンテ



・トルコ・タタール人とインド・ヨーロッパ人との間で馬を宗教的に重要視することも久しく注目されてきている。

『シャーマニズム 上』＜ミルチア・エリアーデ著＞ P50

・厳密な意味でのシャーマニズムとは、なによりもすぐれてシベリアと中央アジアの宗教現象である。この用語はロシア語を通して、トゥングース語の saman に由来する。

『シャーマニズム 上』＜ミルチア・エリアーデ著＞ P41

・昭和9年当時すでに満州はまったく漢人の世界となりおわって、満州人の古い生活を見ることは至って難しい。ただ東部満州の吉林省・黒竜江省の山林・河谷地帯にはいろいろな点でかなり古いしきたりが残っている。東京城部落もその一つ。東京城は 698年から927年にかけて存続し、東部満州一帯を領土として日本との関係も深かった渤海国の首都上京竜泉府の遺跡。この地方では巫女のことを女大仙(大神)と呼んでおり、**この儀式を茶馬**と書き記す。**茶馬は音で J'sa-maであり、まさしく Shamanのこと**。儀式は二段階に分かれる。本当の巫女が現れる前に、男巫が現れて、前座をつとめる。太鼓がシャーマンの祭儀にとって最も大切なもの。

中央および北方アジア語でこれに相当する語

- ・トルコ・タタール語＝ **カム** (kam)
- ・アルタイ語＝ **カム** (kam)、**ガム** (gam)
- ・モンゴル語＝ **カミ** (kami)

『シャーマニズム 上』P41



日本語の神、アイヌ語のカムイ

サムエードのシャーマンを冥界に案内する二匹の案内役



蝦夷鼯(えぞいたち)と二十日鼠

『シャーマニズム 上』P94

「蝦夷鼯」とは、オコジョの俗称であり、北海道に生息するオコジョの亜種であるエゾオコジョを指す。

つまり、

この案内役は北海道由来である。

・間接的にはあるが、こうした神話は天地の交通が可能であった時代を暗示する。ある種の事件か儀礼上の過失からか、この交通は破綻する。(中略)オーストラリアの呪医は、多くの他の地方のシャーマンや呪術師らと同様、一時的で彼らのみに限られてはいるが、簡単に、この天地の「架け橋」を再現する。これはかつては、すべての人間に可能であったものである。

『シャーマニズム 上』P234

天橋立

イザナギが昼寝している時に天に昇る梯子を倒してしまった

シャーマンは個人的に **天地開闢** の時代における
人類の幸運な状態に帰り得る特権を有する人である

『シャーマニズム 上』P246

世界中のシャーマンは「**天地開闢**」神話をもっている



「**天地開闢**」神話をもっているのは日本民族だけ

(注:「**天地創造**」とは異なる)

スメル山 神話(世界の中心にある宇宙山)

- ・モンゴル人、ブリヤート人、カルムーク人はこの山の名を **Sumer(シュメル)** といっている。
- ・モンゴルの神オチルヴァニは鷲ガリデの姿をして、太古の海に潜む蛇ロスを襲い、**スメル山** あたりで三度それを傷つけ、ついにその蛇の頭をくだいた。
- ・モンゴル人はザムブという木を知っているが、その木の根は **スメル山** のふもとにぐいこみ、その梢はこの山の頂に拡がっている。神々はその木の実を食べて生きており、悪魔はこの山の谷間に隠れていて、それらをうらやましそうにながめているという。同様の神話はカルムーク人やブリヤート人の間にも見出される。

『シャーマニズム 上』P442

「統める」=① 多くのものを一つに集めまとめる。
② 一つにまとめて支配する。 統轄する。

日本のシャーマニズム

女巫の主要な機能は次の通りである。

- 一、彼女らは他界から死者の魂を呼び出す。俗に＜ 死口 ＞といわれる。彼女らが生きている者の魂を遠方から呼び出すときは＜ 生口 ＞といわれる。
- 二、彼女らは依頼人のために将来の吉凶を占うが、これを＜ 神口 ＞という。
- 三、彼女らは病気や悪魔祓い、浄めを行なう。
- 四、彼女らは、特別の病気に用いられる薬名を神に尋ねる。
- 五、彼女らは、失せ物に関して教える。

世界中のシャーマンは『太鼓』と『弓』を神事に用いる

例えば

・ツンドラ地帯のシャーマンがその太鼓に与える名、つまり「弓」もしくは「歌う弓」(中略)シャーマンの太鼓は元来邪霊を駆逐するために用いられたものだが、弓を用いてもその目的は達せられる

『シャーマニズム 上』P289

太鼓をたたいて霊界と繋がる = 恐山のイタコ

弓を邪霊を祓う神具とみなす = 日本神道の「**破魔弓**」

- ・トルコ・アルタイ人は北極星を **柱**と考えている。
- ・そしてこの星はモンゴル人、カルムーク人、ブリヤート人では「**金の柱**」、キルギス人、バシュキール人、シベリア人・タタール人では「**鉄の柱**」、テレウト人では「**太陽の柱**」などとなっている。補助的な神話のイメージは目に見えないが北極星に連結された諸々の星のそれである。ブリヤート人は諸々の星は馬の群れで、北極星（「**世界の柱**」）はこれらをつなぐ杭であると想像している。
- ・世界の軸は、具体的には家を支える柱とか、「**世の柱**」と呼ばれる分立した杭の形とかとして示されて来た。たとえば、エスキモー人にとっては、「**天空の柱**」は彼らの住居の **中央にある柱**と同一視されている。アルタイル・タタール人、ブリヤート人、ソヨート人は、テントの杭棒を **天上の柱**と同一のものとしている。
- ・この **中央の柱**は極北地方および北アメリカの未開民族の住居に特有のものである。例えば、サモエード人やアイヌ人の間に、また北部・中部カリフォルニアの諸種族（マイドゥ、東ポモ、パトウィン）やアルゴンキン族の間に見られるのである。供犠や祈禱はこの柱のもとで執り行われる。なぜならこの **柱**は天上の至上存在のもとに通ずる道を開くからである。同様の小宇宙のシンボリズムは、中央アジアの牧夫たちの間にも保持されている。
- ・**世界の柱**は家とは無関係なところを意味することがある。——例えば古代ゲルマン人やラップ人、ウゴール人のごときである。オスチャーク人はこのような **祭儀の柱**を「**町の中央にある威力ある柱**」と呼ぶ。ツィンガラ人のオスチャーク人はその **柱**を「**鉄の人間＝柱**」の名で呼び、それらに祈禱のとき「男よ」とか「女よ」とかと呼びかけ、血の供犠をささげる。また、**世界の柱**のシンボリズムはエジプト、インド、中国、ギリシア、メソポタミアのようなより発達した文化にも普及している。

『シャーマニズム 上』P437

今でも世界中に **柱祭り**がある

- ・日本民族の動物祭祀の流れから馬祭祀が誕生した
- ・「茶馬」神事から「シャーマン」という語が誕生した
- ・本来はアルタイ語でカム(カムイ)モンゴル語でカミ(神)
- ・サムエードシャーマンは北海道の蝦夷魑を案内役とする
- ・世界中のシャーマンは天橋立神話と同じ構図の話をもつ
- ・世界中のシャーマンは日本民族の天地開闢神話を伝える
- ・世界の中心にスメル山があって世界を「統める」
- ・シャーマニズムは日本と同じく「太鼓」と「弓」を用いる
- ・日本上陸前から指を切断したネガティブハンドがある
- ・日本の柱信仰に基づく柱祭りが今でも世界中にある

世界中のシャーマニズムの起源は日本民族